

五山文學新集

第四卷

玉村竹二編

玉村竹二編

五山文學新集

第四卷

東京大學出版會

學術書刊行基金

編者略歴

明治44年 名古屋に生る
昭和10年 東京大學文學部國史學科卒業
同 年 東京大學史料編纂所員
昭和44年 東京大學史料編纂所教授を退官

著 書

『五山文學』至文堂
『夢窓國師』平樂寺書店
『圓覺寺史』春秋社（井上禪定共著）

現 住 所 東京都杉並區上荻 4 丁目 4 番 5 號
杉並コーポラス 303 號

五山文學新集 第四卷

1970年3月31日 發行

定 價 9500 圓***

檢 印
廢 止

© 編 者

たま むら たけ じ
玉 村 竹 二

發行者

福 武 直

發 行 所 財團法人 東京大學出版會

113 東京都文京區本郷 東大構内（811）8814・振替東京 59964

ヨシダ印刷・矢嶋製本

3395-86149-5149

五山文學新集

第四卷

序

こゝに第四卷を世に送り出す事になり、漸く本集刊行の業も半ばを過ぎた感が深い。峠は既に越えたのであるが、物事は、その内なる要因の昂まりが頂點を超えてから、外なる現象の波が一步おくれて高くおしよせるもので、例へば夏至が過ぎてから、夏の暑さが熾盛になり、冬至が過ぎてから、冬の寒さが酷烈になるやうなものである。私もこの三年、多忙な公務の餘暇にこの新集の校刊の業をつゞけ、どうやら兩立させて、その業の半ばを過ぎる處まで來たが、さきの譬の如く、その業が峠を越え、あとは下り坂といふところで、私の身心の疲勞が蔽ふべくもなくなつて來た。もうこれ以上責任ある公務と老大な個人的事業とを兩つながら全うさせる氣力と自信とを失つた。公務の方は、他に幾らでも遂行する人があると信ずるが、この個人的事業には、私の手で是非とも完成させたいといふ強い執念があるので、終に公を捨てゝ私を採ることに決心し、昨年九月末を以て、三十四年半勤務した東京大學史料編纂所を退職させていたゞいた。それ故今日唯今は、この校刊に専念出来る筈であるが、いざさうなつて見ると、毎日出勤しない代りに、運動不足を補ふために、一日六料の散歩をしなければならぬ。それと同時に、偶然にもこの卷に收載したものは、いづれも諸本の異同が著しく、それらの對校や、諸本の搜索に手間取ることも重なり、決して時間的には樂にならないのである。あと三四年この状態が續くであらうが、これは宿命として諦めるより外はあるまい。無職になつた以上、その外に時間を打出す術はもうないからである。

既に第一巻の序に詳述したやうに、嘗て上村觀光居士によつて刊行された『五山文學全集』には、五山文學の主要な作品が收録され、大正初年以來、學界を益すること多大であつたが、惜むらくは、もう一步といふところで中斷してしまつた。且つ文學作品としての價值以外に、歴史の史料としての價值を認めるとすれば、なほ更多くの未刊の五山文學作品があり、そのうちには一流のもので、まだ一般世人の目に觸れることなくして埋もれてゐるものも一二に止まらない。これは斯學のために甚だ遺憾である。どうかして、これらを公刊したいといふ趣旨から、戦前に於て既に元史料編纂所長森末義彰氏（當時は史料編纂官であつた）が、この集の企劃を立て、その手始として、横川景三の『補庵京華集』（本集第一巻所收）を手がけ、原稿作成の段階まで行つたが、戦争の熾烈化によつて、その計劃は頓挫した。それを昭和四十年春、當時の史料編纂所長竹内理三氏が復活され、東京大學出版會から刊行されることになつた。それが本集であり、名づけて『五山文學新集』といひ、一應『五山文學全集』とは別個のものとし、未刊のものを優先するといひ、『全集』をも含めて、他の叢書所收のものなど、おしなべて、既刊のものと雖も、それよりもよい本を得れば、それを底本として、本集に收録し、また時には泥中の白蓮の如き、未知の作者の珠玉篇をも、その間に交へて收載し、世に紹介しようとするものである。例へば本巻に收めた曇聖瑞の『幽貞集』、考叔宗穎の『袖中秘密藏』とか、作者不詳の『雲集集』などがこれである。今後も各巻に一二篇づつ位、巨冊名篇の間に交へて、このやうなものを入れて行きたいと思ふ。

正宗龍統・彦龍周興は、應仁の亂を挟んだ前後に互つて生存した人で、第一巻の横川景三、今後とりあげてゐる豫定されてゐる天隱龍澤・蘭坡景菴・萬里集九と共に、東山時代の作者群に屬する。『五山文學全集』が景徐周麟を除いて、悉く亂前の作品にとどまつてゐるが故に、これら東山時代の作品を紹介するのは、大いに意義があると思ふ。

中巖圓月は、既に『全集』第二卷に『東海一瀛集』としてその作品が收録されてゐるが、偶々東京大學史料編纂所に、『藤隱瑣細集』『文明軒雜談』『辨朱文公易傳重剛之說』など未知の文章を含む寫本の架蔵があつたので、これを底本として、重複して取上げることにしたが、校訂の段階で、いよ／＼異系の諸本のあることを知り、思はぬ方面に問題がひろがり、これを調整是正するためには、文字通り千辛萬苦の辛酸を嘗め盡したが、播磨大藏院に明和元年木版本の「もと本」に接し、丹波法常寺に本書寫本のうち、最も良質なものを見出したことは、本集校刊事業中の最大の收獲であり、多大の勞苦を経たにも拘らず、それを遙かに超えた喜びをかくすことは出来ない。矢張り重複して收録する價值が十分にあると痛感する。『雲巢集』は作者不詳である。他に收録し切れない程詩文集も多いのに、何故にとりわけて、作者不詳の集を入れたか、不審に思はれる向もあらうが、この集の原本が戰災で失はれたといふ愛惜の念もあり、又その作者が義堂周信・絶海中津と親交ある人でもあり、作品そのものも、これらの人のものと大差ない程の出來のやうに思はれたが故である。又それが臨濟宗法燈派に屬する人の集であるのも收録の一理由である。同派の人の詩文集は誠に少いのである。更に、本書の後半には、南北朝時代から應永初期にかけての詩軸の寫が附載されてゐる。これも、史料として貴重だと思つたからである。

この巻の校訂刊行に當つても、從來と變らず、和漢の文獻に通曉した史料編纂所の碩學泰斗太田晶二郎氏の御示教を蒙ること、いよいよますます多大である。外典故事の典拠、難解な文字の解讀については、すべて同氏の御教導に遵つた。それでもなほこの方面で誤謬が残つてゐるとしたら、それは不覺にも同氏に教を請はずに、さかしらにも自己流でやつてのけたためか、或は教を受けても、その趣旨を誤解したために生じたもので、その責任は、専ら私に在るといふべきである。茲に更めてあつく御禮を申述べる。

次に印刷校正については、本巻は専ら千葉大學の田中久夫氏が、多忙な時間を割いて、獻身的な助力を惜しまれなかつた。一々原本をあたつての校正である。また『幽貞集』については、太田晶二郎氏が尊經閣文庫の原本について、綿密な原本當りの校正をして下さつた。又『東海一漚集』のうちの「中正子」の「治曆篇」については、曆法史の權威桃裕行氏を煩はして、周到な校正をしていただいた。共に篤く御禮申上げる次第である。原稿の書寫は、今回も大部分は私自身の手になるが、『雲巢集』全部と『半陶文集』の過半は、二十二年前、他の目的のために、史料編纂所の今枝愛眞氏の手を煩はして書寫したものを、今回轉用したものである。

更に諸本の本文採訪については、『禿尾長柄帚』『禿尾鐵苴帚』は田中久夫氏、『幽貞集』『東海一漚集』は白井信義・池島伸三郎兩氏、『雲巢集』『半陶文集』は史料編纂所の高澤實氏に託して寫眞撮影をしていただいた。又『東海一漚集』の播磨大藏院本採訪については、東京國立博物館の海老根聰郎氏を煩はして、手寫撮影をしていただいた。共にあつく御禮申上げる。

次に諸本の閲覽校訂については、東京大學史料編纂所には『東海一漚集』『半陶文集』『雲巢集』を底本として、前田育徳會尊經閣文庫には『幽貞集』を底本として、建仁寺兩足院には『禿尾長柄帚』『禿尾鐵苴帚』『東海一漚別集』『一漚餘滴』を底本として、東福寺靈雲院には『袖中秘密藏』を底本として、また建仁寺兩足院には『中正子』を、播磨大藏院・妙心寺龍華院・丹波法常寺には『東海一漚集』を校訂本として、足利學校遺蹟圖書館・東京大學史料編纂所には、『半陶藁』を校訂本として、内閣文庫には『禿尾長柄帚』を校訂本として、瀧田英二氏には明和版本『東海一漚集』を校訂本として、東京學藝大學の安良岡康作氏には明和版本『佛種慧濟禪師語錄』を校訂本として、閲覽撮影借覽利用を許された。

また挿入寫眞掲載については、東京國立博物館・建仁寺兩足院・尊經閣文庫・建仁寺靈源院・尾張妙興寺・京都梅津長福寺・藤井明氏の御承諾を得た。寫眞撮影については、靈源院所藏のものについては神奈川縣立博物館の中島亮一氏及び京都國立博物館の金澤弘氏、法常寺所藏のものについては史料編纂所の高澤實氏、兩足院及び東京國立博物館所藏のものについては同館の海老根聰郎氏に、妙興寺所藏のものについては史料編纂所の彌永貞三、南山大學の新井喜久夫、愛知大學の歌川學の三氏に、長福寺及び藤井明氏所藏のものについては京都國立博物館の金澤弘氏及び南禪寺正因庵の櫻井景雄師にお世話になつた。共に校訂者として幸甚の至で、心から謝意を表する。

これら總てのことを含めて、建仁寺兩足院の伊藤東愼師、內閣文庫の福井保氏、足利學校遺蹟圖書館の森江眞二氏、尊經閣文庫關係者としての太田晶二郎氏及び同文庫の飯田瑞穗氏、大藏院住持櫻木宗峰師・同副住青木憲宗師、法常寺の宮裡顯秀師、東福寺靈雲院の岡根守堅師、禪文化研究所の木村靜雄・加藤正俊兩師、瀧田英二氏・安良岡康作氏にあつく御禮申上げる。又大藏院本閱覽の斡旋紹介の勞をとられた東京芝金地院の松浦勝道師、法常寺本及び妙心寺龍華院本の閱覽又は利用の斡旋紹介をして下さつた關西學院大學の永島福太郎氏、兩足院の伊藤東愼師及び禪文化研究所の木村靜雄師、東福寺靈雲院本の閱覽の斡旋をして下さつた同寺內願成寺の福嶋俊翁師、龍華院本の存在をお教へ下さつた瀧田英二氏等諸賢の御懇情にも深く感謝する次第である。

なほ史料編纂所長桃裕行氏、同所の沼田次郎・彌永貞三・川村新一郎諸氏、南禪寺正因庵の櫻井景雄師、廣島大學の中川徳之助氏、駒澤大學の葉貫磨哉氏には有形無形の助言や激勵を賜はつた。殊に諸本・底本の大半を占める建仁寺兩足院本の調査閱覽撮影について、終始一貫絶大な便宜をお與へ下さる同院主伊藤東愼師には、重ねて感謝の意を表する。

終に、この出版に際しては、東京大學出版會の中平千三郎・成田良輔・齋藤至弘・水流京子（舊姓公文・大江治一郎）の諸氏に、一方ならずお世話になり、御迷惑をかけた。こゝに改めて御詫と御禮を申上げる。

なほこの出版は、文部省昭和四十四年度科學研究費補助金（研究成果刊行費）の交付を受けて成就したものである。

昭和四十五年三月十九日

玉村竹二

凡 例

一、五山文學新集は、鎌倉時代より江戸時代に亙る日本五山禪林の漢文學作品を、校訂刊行するものである。その作者が宋・元・明の來朝僧であらうと、日本僧であらうとを問はず、また一部の詩文集のうちに包含される法語・語錄的な部分をも削除せずに収載するのを基本方針とする。

一、本卷には正宗龍統・一疊聖瑞・中巖圓月・在庵普在弟子某僧・彦龍周興の作品を収めた。

一、卷末に各集の解題を附した。その解題は作者の傳記、底本及び校訂本として用ひた諸本の解説、作者關係宗派圖より成る。

一、正宗龍統集の末に、附録として、同派の無名の作者にして、遠く薩摩の僻地に在つて、孤立しながらも創作活動の中心となつてゐた考叔宗穎及びその門下の作品集たる『袖中秘密藏』を附した。恰も東福寺靈雲院にその古寫本が藏せられて居り、これを世に出したいと思つたからである。

一、『雲集集』も作者不詳のものであるが、その作風は、南北朝時代中期の一般水準に達し、或は少しその水準を抜き、義堂周信などに迫るものがあるやうに思はれるからである。而も義堂や絶海中津とも交友があり、同じ詩會に列し、同じ題で作詩し、または和韻してゐるから、當時の五山友社の穿鑿には大いに役立つものと思ふ。この本も第三卷に收めた『建長寺龍源庵詩集』と同様、後半には成安・正體などといふ、應永初期の人の作品をはじめ、南

北朝から應永頃の諸詩軸の寫しが雜然と附加されてゐるが、それらをも削除することなく、そのまゝの形で附收した。

一、『東海一瀚集』は、既に『五山文學全集』第二卷に收められてゐるが、偶々東京大學史料編纂所に、全く系統の異なる寫本が架藏されてゐるので、これを底本にすれば、重ねて校刊する意味があると思つて、これを收載することにしたのである。しかし子細に檢すると、この本は、一方では、流布本（明和元年木版本「五山文學全集の底本」）にない佚文が多くあるが、總體として收録作品の數は少なく、一方では流布本にあつて、この本にないものが相當に多いので、拾遺として、その部分を漏れなく收め、本集のみで、中巖圓月の全作品を見得るやうにした。

一、『半陶文集』についても同様である。從來この集は明曆木版本『半陶藁』六卷が世に流布したが、讃岐松平家に傳へられた天正奥書の古寫本『半陶文集』の方が、内容が多いので、今回は、これに據ることにした。

一、『禿尾鐵苜蓿』と『袖中秘密藏』及び『半陶文集』の底本は、古寫本又はその忠實な謄寫本に據つたので、校刊に當つて、用字は悉く底本に極めて忠實ならんとした。その他は、江戸時代の新寫本であるので、それ程の嚴密さを保持せず、適宜『康熙字典』の字體に改めた。但し改行・空白等については、どの本も同様に嚴密に底本の體裁の再現に力め、闕字・平出・擡頭は、悉く底本のまゝ示した。

一、詩文の題は四字下りに一定し、七言絶句の場合、底本に於て、詩題が詩の後の餘白に記されてゐることがあるが、校刊に際しては、それらを悉く詩の前に移し、四字下りにして示した。『幽貞集』『東海一瀚集』『東海一瀚別集』『一瀚餘滴』『雲巢集』『半陶文集』等、いづれもこれに當る。

一、底本の讀點にとらはれず、新たに讀點と並列點とを施し、底本の返點・送假名（殆どないが）は省略した。但し振

假名は、解讀に便益ありと認めた場合にのみ、これを残置した。

一、底本の字傍の朱點・朱圈は、原則として頭書に註した。

一、底本の朱引は省略した。

一、用字は、なるべく底本通りにするやうにつとめた。但し前項に觸れたやうに、底本の新古にしたがひ、多少緩急の差をつけた。左の括弧内に示す文字は、各本に共通して、括弧外の字體に統一した。

圓	圓(円を用ひず)	與(与)	圍(围)	離(离)	學(学 幸)
劉	劉(刘)	對(对)	關(関)	數(数)	聲(声 声)
覓	覓(覓)	含(含)	來(来)	盡(尽)	圖(图)
乘	乘(乘)	昂(昂)	雙(双)	舊(旧)	舉(幸 举 乳)
實	實(実)	璵(珣)	嶼(屿)	點(点)	籬(篱)
桑	桑(桑)	獨(独)	濁(浊)	答(荅)	厭(厭)
處	處(処 處)	還(还 還)	流(汙)	壓(壓)	佛(仏)
拂	拂(払)	燈(灯)	亂(乱)	屬(属)	囑(嘱)
邊	邊(辺)	廬(庐)	爐(炉)	爲(為)	所(所)
回	回(回 回) ○『幽貞集』では「回」	九(凡)	壑(壑)	擇(択)	澤(沢)
釋	釋(釈 尺)	國(国)	前(前)	勢(勢)	要(要)
蘆	蘆(芦)	承(承)	函(函)	涵(涵)	涼(涼)

祇(祇「たゞ」「つゝしむ」の場合のみ)

龍(竜)

龜(亀)

嘗(嘗)

告(告)

浩(浩)

號(号)

萬(万)

寶(宝)

濱(濱)

賓(賓)

壹(壹)

會(会)

周(周)

即(即)

你(爾 你)

譽(譽 訃)

一、同一文字にして二體以上を併用した主要なものは左の通りである。いづれも底本のそれぞれの箇所用字に従つ

たものである。

歸 婦 販

叢 叢 叢

蓋 蓋

筆 華 筆

等 等 木

遷 迂

得 得

聞 聾

虛 虛

鼎 鼎

船 舩

算 算

答 富(答は用ひず)

柏 栢

侍 侍

時 眈 眈

詩 訖

紙 帑

節 節

館 館

最 冢

箇(个ケは用ひず)

楞 稜 稜

德 惠 往

庵 菴

役 役

秋 秋 穉

靈 灵

總 總

摠 摠

蘇 蘇

書 昏

疏 疏

徒 徒

草 艸

年 季

聰 聰

事 夏

鬢 鬢

條 條 条

寶 寶 珣 璠(宝は用ひず)

後 后

洲 洲

州 州

國 囯 國(国は用ひず)

淵 淵 困

養 羴(養は用ひず)

也 苳

花 苳 華

稿 藁 稟

邇 邇

爾 尔(尔は用ひず)

一、正宗龍統集の『禿尾長柄帚』に於ては、底本たる建仁寺兩足院本と内閣文庫とが、又、中巖圓月集の『東海一漚集』の底本、『一漚餘滴』（史料編纂所本）と法常寺本『東海一漚集』とが、又、彦龍周興集の『半陶文集』（底本）と明暦年間刊行の木版本『半陶藁』とは、相異なる系列に屬し、相互に相補ふべき箇所が多いので、これら各二本間の對校がそれらの集の校訂の根幹をなす作業で、特別な意味をもつと考へる。よつて、他本との異同と區別して、それぞれ内閣文庫・法常寺本『東海一漚集』及び木版本『半陶藁』との文字の異同を示す校訂註には『』を用ひ、そのうち明かに底本の文字よりすぐれて採るべきものには、『』の下に*印を附して、讀者の判斷に便した。

一、校訂者の私見による異同註は、相當確實に正鵠を得たと思はれるものでも、他本との異同註と識別するために、その註に「カ」を附して、私見なることを表現した。

一、中巖圓月集のうち、底本たる史局本と明和版本とは、その共通部分についても、配列の順序が異なる。また『一漚別集』『一漚餘滴』とも共通部分がある。それらの對照に便するために、底本史局本と『一漚別集』『一漚餘滴』を通して、下段にゴシック體活字の數字(2345……)を以て、順位番號を附した。そして、その上段に括弧を附して明朝體の數字(2345……)を以て、明和版本の配列順位を示した。ハイフンによつて連ねられたものは、ハイフンより前の數字は明和版本の卷數である。その後の數字は版本の順位番號であるが、卷毎に改番せず、卷一の卷頭より卷四の卷末までの通し番號である。更にその上段に括弧がなくして附せられた明朝體の番號は、『史局本』『一漚別集』『一漚餘滴』相互の間の重複を示すものである。通し番號(順位番號)に同一番號がつゞき、a b c d e f等を附してゐるのは、校訂者が通し番號を附する際の不手際によつて、番號の振りおとしを後に發見し、順送りに改番する煩はしさを避けるために施したものである。又二箇の順位番號がハイフンによつて連ねられてゐるのも、校